

小学校社会科における表現力の育成
—知識や情報を関連付ける思考ツールを活用して—

荒木翔太・山口陽弘

群馬大学教育実践研究 別刷
第38号 323～328頁 2021

群馬大学共同教育学部 附属教育実践センター

小学校社会科における表現力の育成 —知識や情報を関連付ける思考ツールを活用して—

荒木 翔太¹⁾・山口 陽弘²⁾

1) 伊勢崎市立板東小学校

2) 群馬大学大学院教育学研究科教職リーダー講座

Teaching the Ability to Express in Social Studies at Elementary School: With the Use of Thinking Tools for Connecting Their Prior Knowledge with New Information

Shota ARAKI¹⁾, Akihiro YAMAGUCHI²⁾

1) Isezaki Municipal Bando Elementary School

2) Program for Leadership in Education, Graduate School of Education, Gunma University

キーワード：教職大学院，社会科，表現力，思考ツール

Keywords : Program for Leadership in Education, Social Studies, the Ability to Express, Thinking Tools

(2020年10月30日受理)

1 問題

(1) 小学校社会科における課題

ベネッセ教育総合研究所が2015年に第5回学習基本調査を行った。その中のアンケート調査の項目に「教科の好き嫌い」を問うものがある。「好き」「まあ好き」「どちらでもない」「まあ嫌い」「とても嫌い」の5択で回答するものだ。「とても好き」「まあ好き」を肯定的評価とすると、社会科の肯定評価は55.6%であった。これは国語や算数等を含む10教科の中で最下位である。また、「授業の理解度」についても「ほとんどわかっている」「70%くらいわかっている」と解答した児童は、72%である。これは他の教科に比べて割合が低い。こうした問題がある原因として、「覚えることが多い」や「社会科は何を学習しているのかわかりにくい」といった印象をもっていると考えられる。

(2) 児童の実態における課題

国立教育政策研究所教育課程研究センターは2012年に小学校学習指導要領実施状況調査と称してペーパーテストと質問紙調査を実施した。この結果の分析から、「資料から読み取った情報を関連付けて、社会的事象が成立する条件などを考え表現することに一部課題がある」や「様々な情報を総合して、社会的事象の働きなどを考え表現することに課題がある」といった問題が挙げられた。つまり、「社会的事象の意味を考え表現することに課題がある」と言える。そしてこの課題を、社会的事象の意味を「考えること」と「説明すること」に課題があると捉えられる。

2 目指す児童像

問題で整理したことを受け、また実際に実習校が決定した段階で、目指す児童像を次のように設定した。学習内容を実感し、知識や情報を関連付け、社会的

事象の意味を思考ツールによって考え、表現することのできる児童である。図1に研究全体の構想図を示す（補足：実際に指導対象となった児童は、第一筆者の教職大学院の2年次に実習校が決定した段階で確定したという経緯がある。そのため、小学校社会科における一般的な課題と、今回の研究で実際に設定した目指す児童像とは、完全には一致していない。実習校での課題は社会科の「好き、嫌い」にはあまり問題はなく、それよりは「思考・表現」力に課題があったため、このような児童像が目指すものとなった）。

3 本研究の手立て

本研究実践は、小学校社会科学習指導要領における社会的な見方・考え方の一つである、「関連付ける」思考を繰り返し、最終的に社会科の「表現力」である、考えたことや選択・判断したことを説明する力の育成につなげる。そのための手立てとして、次の二つを考えた。

（1）知識の構造を意識したパフォーマンス課題

本研究実践は、社会科の表現力の育成とその効果を検証するために、単元学習のまとめ課題としてパフォーマンス課題を設定した。この場面において授業で身に付けた知識や自身がすでに獲得している知識等を総合して自分の考えを記述することは、児童の説明力及び表現力を育成することに効果的であると判断して、一つの有効な手立てとして設定した。この最終的なパフォーマンス課題から西岡の唱える「逆向き設計」（西岡，2008）で単元構造を分析し、指導案を作成していくことが効果的ではないかと筆者らが考えたのである。

また、このパフォーマンス課題を作成するに当たって、児童が獲得する知識を具体的に捉えさせるために、単元全体の「知識の構造図」を想定する必要がある。北（2011）は、単元計画を作成する際に、知識の構造を想定することで児童が身に付けさせたい力が明確になるとしている。そのため本研究は、北（2011）の方略を受け、単元を通して最終的に獲得する知識を「概念的知識」、授業一単位時間で獲得する知識を「具体的知識」、具体的知識を獲得するための知識として「用語的知識」といった三段階に分けて「知識の構造

図」を作成する。

（2）言語活動の充実を促す手立て

①思考ツールの活用

社会科の表現力を育成するに当たり、児童が自身の考えを説明する時間が必要である（澤井，2013）。そのため、思考の可視化をすることが説明活動を促進する手立てと言える。田村・黒上（2013）によれば、情報や知識、思考の可視化において、思考ツールを取り入れることが効果的であるとしている。これを受け、本研究には、思考ツール（ウェビングマップなど）を取り入れることで、「児童の思考の可視化」と「説明活動の充実」を期待して手立てとする。

研究全体の構想を図1に示す。

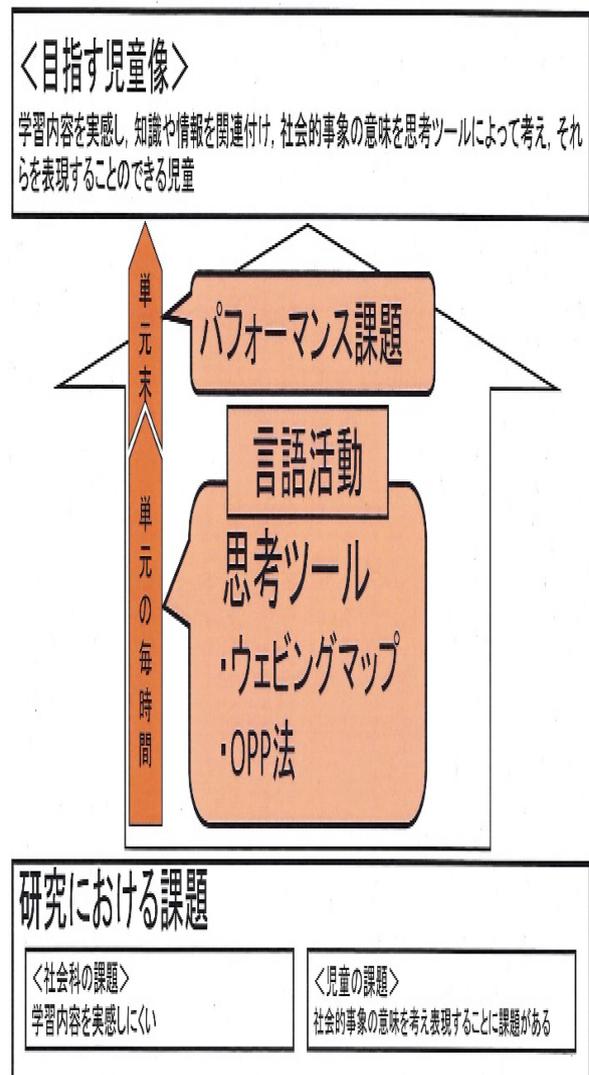


図1 研究全体の構想図

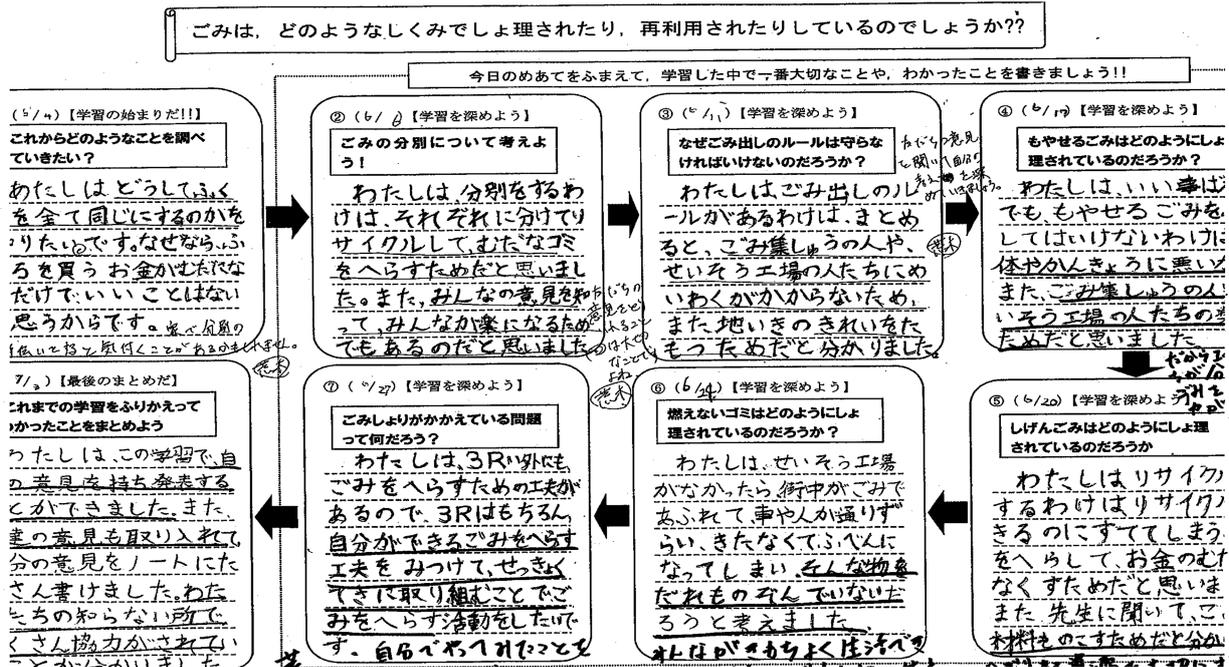


図2 OPPシートの児童の実例

②ワンページポートフォリオ (OPP) 法の活用

前述の「問題」部分で挙げた、「社会科は何を学習しているかわからない」といった課題を解決する方略として、学習の連続性を意識させる必要がある。そのために、もう一つの手立てとして、ワンページポートフォリオ法（以下OPP法と表記する）を取り入れる。OPP法は、児童が一枚のプリントに毎時間の授業で学んだことを振り返りとして記述していくもので、単元全体で何を学習したのかその過程を可視化するための方略である（日部・山口・石川，2012）。また、振り返りを児童同士で伝え合うなどの説明活動を行うことができるため、社会科の表現力の育成に有効であると判断し、本研究の手立てとする。実際に児童の書いたOPPシートの例を図2に示す。

4 授業実践

本実践は、令和元年度に前橋市K小学校の第4学年の児童（23名）を対象として実施された。

これは、第一著者の教職大学院のM2年次の課題解決実習として、ほぼ半年にわたって実施した実習を元に研究・実践を行ったものである。表1に実践計画の概要を示す。

授業実践において、「つかむ→広げる→まとめる」

表1 パフォーマンス課題の実践計画

月	実践Ⅰ 5月	実践Ⅱ 6月	実践Ⅲ 9～10月
単元	事こや事けんを防ぐ	わたしたちのくらしとごみ	わたしたちのくらしと水
課題	事故や事件を防ぐためにできることを考えよう。	ごみを減らすために自分ができることを考えよう。	水を大切にするために自分ができることを考えよう。

の過程の中で、児童一人一人の説明力や振り返りを記述するトレーニングを積んできた。特に、自分の考えたことを文章で書く、伝え合う活動に力を入れてきた。授業で取り扱った単元は、前橋市の公衆衛生、公助及び公共に関するものである。どの単元も、児童にとって、身近な内容を扱ったものである。そのため、児童一人一人が積極的に取り組む様子が見え始めた。9月～10月に扱った「わたしたちのくらしと水」においては、普段何気なく使用している、水道水が送られてくる仕組みや、使用した後の行方について学習した。中でも、水の循環について理解させる活動は、児童の気付きや理解が深まった様子が見られた。児童に

は、水の場面カードを配布し、いくつか正解があると伝え、その順番をグループで考えさせた。グループごとの回答を比較させ、「なぜこれらは正解なのか」と問いかけるなどし、授業を展開した。また、単元末で行ったまとめ課題は、単元で学習したことを総合して考える活動に取り組みさせた。いきなりまとめ課題を書かせるのではなく、これまでの単元学習で活用してきた知識を整理及び関連付ける時間を設けるために、思考ツール的一种であるウェビングマップに取り組みさせた。どの課題も、児童自身ができる取組やそのよさについて記述するものにした。その上で、自分が考えたことをペアや学級全体に伝え合う時間をとることができた。

5 成果の検証

(1) アンケート結果から

以下の表2に社会科の意識アンケート調査の結果の一部の概要を示す。

このアンケートは、課題解決実習の開始時、夏休み前、終了の時点の三段階で児童にアンケートを実施した。

表2 社会科意識アンケート結果
(1～2と回答した児童の割合)

	5月	7月	10月
社会科が好き	68%	86%	87%
社会の授業が分かる	86%	86%	100%
他者の意見を聞くことのよさ	73%	82%	96%
理由をつけて説明できる	59%	63%	78%

注) 社会科における、学習意識の変容については、5月と7月、10月の計3回にわたり、アンケート調査を実施した。今回の調査項目全てにおいて、1～4段階評価(1を最もよい評価とする)をつけるものとした。

以上のアンケート結果から、ほとんどの項目の割合で望ましい変化が見られた。「自分の意見に理由をつけて説明する」意識項目においては、良好な結果が得られた。「1～2」と回答した児童は、5月は6割に満たなかった数値が、10月の段階では、8割弱の数値

まで伸びている。また、この項目と関係の深い「他者の意見を聞くことのよさ」の意識項目においても良好な結果が得られたことも成果と言える。

(2) OPPシートの記述から

毎時間、授業の内容を振り返り、分かったことや自分なりに考えたことを書かせてきた。そのことにより、はじめは記述の量が少なかった児童も、回数を重ねることで文章量が増加し、その質自体も向上する児童が増えた。これは、本研究における成果である。

(3) パフォーマンス課題の結果から

計3回実践した単元の末に、まとめ課題としてパフォーマンス課題に取り組みさせた。それぞれのパフォーマンス課題は、研究実践に取り組む以前から設定した長期的ルーブリックを基礎として作成したので、表3にその一部を示す。本研究における「長期的」という意味は、実践が終了する10月下旬の児童の姿を想定したものである。なお、長期的ルーブリックの作成については、山口(2013)の教育評価の際のルーブリック作成のヒントの記述を参考にして作成した。以下のものは、いわゆるB基準に該当するもので、この段階に達していれば児童が概ね求めるレベルに達していると判断できるものを代表して記述している。これは表4でも示しているように、今回のパフォーマンス課題では3段階で評定しているが、そのB基準に該当する。

表3 長期的ルーブリック

知識・技能	・思考ツールを活用して、授業で分かったことと、身近なことを関連付けて整理できる。
思考力	・授業で分かったことをもとにして、社会的事象の意味を考えることができる。 ・授業で知った、社会にみられる課題に対して自分たちで協力できることなどを考えることができる。
表現力	・授業で考えたことを文章や口頭で説明する際に、根拠を示して述べることができる。

長期的ルーブリックの3段階の集計結果を、5月～10月にかけてどのように移行したかを表4に示す。特

に5月の段階ではCの段階の者が三分の一以上存在した。それらは記述がほとんどできなかつたり、無回答であった児童であったが、それが10月の段階になると一人もいなくなったことが大きな成果であった。

表4を見ると、5月末から10月上旬のパフォーマンス課題において、C評価の児童の人数は徐々に減少していき、B評価以上に到達する児童の人数が高まり続けたことが分かる。これは、成果の現れである。また、5月末と7月のA評価の人数を比較すると、増加していることが分かる。さらに、10月のA評価の人数においても、7月段階を維持しており、安定的な成長であることが分かる。この結果においても、一つの成果と言える。

表4 パフォーマンス課題の評価の変容

月	実践Ⅰ 5月末	実践Ⅱ 7月上旬	実践Ⅲ 10月上旬
課題	自分の安全は自分で守る	ごみの減量するよさ	節水のよさ
A	9%	52%	48%
B	49%	39%	52%
C	39%	17%	0%

注) 合計が100%にならないのは、欠席した者をカウントしなかったためである。

6 考察

(1) 学習意識の変容

表2で示した結果の内、「社会科が好き」、「社会科の授業が分かる」を問うもので、児童の学習に対する意識に望ましい変容がある。これは、普通の授業の中で、児童同士が意見を交流する時間を設けたことで、多様な考えがあることに触れ、新たな発見や気づきを見出しているからだと言える。その結果、児童が主体的に学習に取り組むようになり、意欲の向上につながったのだと言える。また、この要因として、児童自身の説明力に対する意識の変化がある。「理由をつけて説明することができるか」という項目が上昇傾向にあることも、学級全体が、より分かりやすい意見

を聞く機会が増えたことで、児童の傾聴の姿勢に望ましい変化があったと考えられる。

(2) 表現力の変容

①思考ツールの活用から (OPPシート、ウェビングマップ)

OPPシートに取り組ませたことで、自分の考えたことを言葉で表現する力が養われたことが言える。授業の毎時間の振り返りを書くことで、授業の内容が整理され、「ねらい」に即した、簡潔で分かりやすい文章が書ける児童が増加した。そして、このような結果が得られたのも、毎時間振り返りを書くトレーニングをしてきたからである。

関連付けて考える思考は、ウェビングマップによって高めることができた。学習で活用してきた言葉を線で結び、知識の関係図を作成する時間を設けた。その結果、「節水のよさ」のパフォーマンス課題では、「水の無駄使いがなくなるから」だけでなく、無駄使いがなくなることによって生じる、家庭のメリット等を加えた説明を書く児童が多く見られた。これは、ウェビングマップが児童の説明力を養うことに有効な手立てと言える。

②パフォーマンス課題から

本研究は、「考えたことに理由をつけて説明する力」を養うことに焦点を置いて、実践に取り組んできた。表4を見ると、全員が望ましい水準に到達している。このような結果から、多くの児童がこれまでの学習を関連付け、総合して考えることができたことが分かる。こうした活動に取り組ませることにより、単元全体で、より深い理解への実現が期待できる。また、児童一人一人がそれぞれの考えを書き出し、ペア活動や全体発表で意見交換をすることができたため、言語活動の質を向上することに有効な手立てとなっていた。このことから、児童において、他者に自分の考えを説明する力が高まったと言える。

(3) 授業内容の変容

教師側が設定した、児童の実態に合わせた問いの質に課題があった。単元を経ていく中で、児童の思考の高まりや表現力の高まりは認められた。特に、上位層の児童や、もう少しで上位層に入りそうな児童に対す

る、もう1ランク上の問いを授業者が設定できていなかったため、授業内で退屈をしてしまう児童を作ってしまった。このことで相対的な思考や表現力の高まりとまではならなかった。この原因として、授業者の教材研究の至らなさやねらいに即した資料の選択に課題がある。パフォーマンス課題の結果からも、7月から10月の割合を比較すると、B基準に到達する児童は増加したものの、B基準からA基準に到達する児童の増加が認められないことから読み取れる。

参考・引用文献

- ・ベネッセ教育総合研究所 (2015) 「第5回学習基本調査」データブック <https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail.php?id=4801> (2020年9月11日閲覧)
 - ・日部貴博・山口陽弘・石川克博 (2012) 『わかる授業により児童の学習意欲を高める社会科学習指導—授業間のつながりに着目した振り返り活動の工夫を通して—』群馬大学教育実践研究, 29, 201-210.
 - ・国立教育政策研究所教育課程センター (2015) 小学校学習指導要領実施状況調査 教科別等分析と改善点 (小学校 社会)
 - ・北俊夫 (2011) 『社会科学力をつくる“知識の構造図”—“何が本質か”が見えてくる教材研究のヒント—』明治図書
 - ・澤井陽介 (2013) 『小学校社会科授業を変える5つのフォーカス—「よりより社会の形成に参画する資質や能力の基礎」を培うために—』図書文化社
 - ・田村学・黒上晴夫 (2013) 『考えるってこういうことか! 「思考ツール」』小学館
 - ・西岡加奈恵 (2008) 『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』明治図書
 - ・山口陽弘 (2013) 「第8章 ルーブリック作成のヒント—パフォーマンス評価とポートフォリオ評価—」佐藤浩一 (編著) 『学習の支援と教育評価』北大路書房 pp.172-201.
- (本論文は第一著者の令和元年度群馬大学大学院教育学研究科専門職学位課程(教職大学院)の課題研究報告書の一部に加筆修正したものである。)

(あらき しょうた・やまぐち あきひろ)